

宮本地車噺



第15回「神々の活躍～日本神話～ その三」



八岐大蛇と対決するスサノオ。車板の彫物なので大変見えにくい場所だが、小さいながらも精巧に彫られており非常に感心する。

前号から続き) 放浪中に出会った老夫婦とその娘、櫛稲田姫くしなだひめの為、大蛇を退治することになったスサノオ。その大蛇とは「八岐大蛇」やまたのおろち八つの頭と八本の尾を持ち、目はホオズキのように真っ赤で、背中には苔や木が生え、腹は血でただれ、八つの谷、八つの峰にまたがるほどの大きさということでした。まずスサノオは櫛稲田姫の姿を櫛に変え自らの髪に挿し隠してしまいます。次に老夫婦に何度も醸した強い酒を造るように言います。さらに八つの門にそれぞれ棧敷を作り、酒を満たした樽を置き大蛇が来るのを待ちました。やがて大蛇が現れました。大蛇は備えていた酒樽に八つの頭を垂れ入れ酒を飲み干し、そのまま伏して眠り込んでしまいました。そこでスサノオは自らの剣で大蛇を斬り刻み退治に成功しました。

大蛇の尾を斬った時に自らの剣が欠けてしまいました。見ると尾の中から太刀が出てきました。これは不思議な物だと思いスサノオはこの剣をアマテラスに献上しました。そして、櫛稲田姫を妻としました。



大屋根正面車板、まだ屋根に組み入れられる前に撮影した写真。画面右下、「大蛇退治」と書かれている酒樽には酒を飲み干す大蛇の姿が見られます。

この物語は単なる神話ではなく以下のように解釈されています。やまたのおろち八岐大蛇は度々水害を起こす川を例えており、たくさんの頭や尾は川の支流を表しています。「大蛇から櫛稲田姫を守った」ということは治水工事をして川の下流の農耕民を守ったということです。また、大蛇の尾から剣が出てくるといふ箇所については「大蛇の腹が血でただれている＝川底が赤く濁っていた」と川の上流では砂鉄が取れたことを示しており、「剣を手に入れた＝砂鉄を手に入れ製鉄が出来るようになった」と推測することが出来ます。

さて、この大蛇から出てきた剣はあめのむらくものつるぎ「天叢雲剣(後の草薙剣)」は天乃巖戸の際に作られたやたのかがみ「八咫鏡」やさかにのまがたま「八咫瓊勾玉」とともに三種の神器の一つとなりました。



宮本番号持ち「素戔鳴尊」右の写真はスサノオが腰に着けた瓢箪です。中には大蛇退治の時の酒が入っており、瓢箪の栓は八岐大蛇の牙で作られたものです。